

ジェンダー視点による小学校家庭科「家庭の仕事」の授業分析

横浜国立大学教育学部附属横浜小学校

小笠原 由紀

横浜国立大学教育学部

堀内 かおる

1. 問題の所在と研究の背景

1-1. 子どもの生活・意識にみるジェンダーの課題

2030年までに達成すべき持続可能な開発目標(SDGs)の一つに、「5. ジェンダー平等を実現しよう(Gender Equality)」が挙げられている。ジェンダー平等は、教育の場においても前提となっている。2019年に実施された「男女共同参画社会に関する世論調査」(内閣府)において、男女の地位の平等観について尋ねた結果によると、学校教育の場は男女「平等」だという回答が61.2%を占めていた(内閣府 2019)。これは「家庭生活」や「職場」における男女平等観より10ポイント以上の高率である。しかしその一方で、学校が男女平等な場かどうか「分からない」という回答は17.7%を占めており、3年前実施の2016年調査において14.4%であったことと比較すると、漸増している。約2割の回答者が学校教育について、男女平等の場かどうか「分からない」と回答している点は、学校教育とジェンダーについて考えるうえで、重要な示唆を与えていると考える。つまり、一見して「男女平等」な学校であるが、アンコンシャス・バイアスとしてのジェンダー差別につながる事象が当然視されていることはないのか、ジェンダー・センシティブな視点(Houston 1985)で検証する必要があるだろう。

日本の場合、SDGsで掲げられている「ジェンダー平等」に関して、義務教育段階での就学率や教育課程の内容といった面における男女平等は、概ね達成されていると言える。しかしこれは、量的な面で教育の機会均等が実現し、性別を問わず学びの機会が開かれているということの意味する。その一方で、学習場面における質的な男女平等に目を向けると、授業空間の中で隠れたカリキュラムが教師の意図しないところで作動してはいないだろうか。また、子どもたちが家庭生活経験の中で保護者や身近な大人たちとの関わりを通して、ジェンダー・バイアスを刷り込まれた結果、無意識のジェンダー観を内

面化しているかもしれないのである。

堀内らは、2020年に横浜市立小・中学校の児童生徒を対象として、ジェンダー意識と実態に関する調査を実施した(堀内他 2021)。その結果から明らかになったのは、子どもたちは学校の中でジェンダーに関わらない行動を保証されているとはいえ、自らの判断で、従来のジェンダー規範に則った「女の子として期待される役割」や「男の子として期待される役割」を選択していると見て取れる状況であった。

また、「家庭の仕事」すなわち家事を行うことに対する女子児童生徒の指向性の高さが明らかになり、男子児童生徒と比較して顕著な傾向を示していた。さらに、男子中学生の約4割、女子中学生の約5割の者が、親や親戚、教師等からジェンダーに関わる注意を受けた経験があると回答していた。具体的には、「男は泣くな、我慢しろ」「女の子だから行儀良くしなさい」といったステレオタイプなジェンダーに基づく注意である。その一方で、同調査では、男子児童生徒も女子児童生徒と同様に、家事・育児を行う男性を「かっこいい」と捉え、好意的なまなざしを向けていたことも明らかとなった。先行研究におけるこれらの知見から、子どもたちは、男女平等というジェンダー・バイアスにとらわれない選択を望ましいものとする社会の中で、それを当然視している様子が伺え、ジェンダーにとらわれない一面も見られた。しかし同時に、日本社会に潜在化するジェンダー文化に基づくアンコンシャス・バイアスが子どもたちに内面化されている可能性も示唆された。そしてこのことは、子どもたちの保護者である身近な大人たちにとっても、同様の影響をもたらしていると言えるだろう。

日本のジェンダー・ギャップ指数はG7諸国の中でも最下位を記録し続けており(World Economic Forum 2022)、ジェンダー平等という目指すべき社会の理念は理解しつつも、長年培われてきた生活文化や習慣は、容

易に変わらない。この生活文化や習慣を変えていくことができるのは、教育という営みにほかならないだろう。なぜなら教育は、この後の社会の担い手となる子どもたちに対し、望ましい文化を伝えていく次世代育成の営みだからである。SDGs の目標 5・ジェンダー平等達成のために、学校教育がなすべきことは多いと考えている。

1-2. 家庭科における「家庭の仕事」に関わる実践の課題

家庭科教育は、「よりよい生活」の担い手を育てる教育として、子どもたちに対し、ジェンダー規範の解消に向けた気づきの機会をもたらしてきた。「ジェンダー」という言葉こそ用いてはいないが、小学校段階から、家族・家庭生活に目を向け、学習の中でジェンダー平等について考える機会を提供している。

『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説家庭編』(2018)では、「家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うこと」が育成すべき資質・能力の一つとして示されている。この「家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度」を育成する上で、特につながりが深い学習内容に「家庭生活と家庭の仕事」がある(以下、「家庭の仕事」と示す)。「家庭の仕事」では、自らも家族の一員として生活時間の使い方を見直して家庭の仕事を計画・実践し、家族に協力しようとする意欲を高めたり、家庭生活を営む上で、互いに協力し分担する必要があることを理解したりすることがねらいとされている。これまでも、日々何気なく行われている衣食住に関わる家庭の仕事を見つめ直したり、長期休暇を利用して子どもが自ら自分にできそうな家庭の仕事を担ったりすることで、家族が協力して家庭生活を営む大切さに気づけるように工夫した実践がなされてきた。

ジェンダーとの関わりで家庭の仕事を捉える視点は、1989 年の先行研究までたどることができる。藤原ら(1989)は、小学生から高校生までの児童生徒 548 名を対象として、「家事手伝いの頻度および家事に対する性別役割分業意識」について、質問紙調査を行い明らかにしている。この調査は、家庭における子どもの家事参加実態について明らかにした先行研究として有意義であるが、「家事手伝い」という捉え方をしている点には、留意が必要である。藤原らの調査結果によると、全体的に当時の子どもたちの家事参加状況は低率であり、特に男子児

童生徒の参加が少ないことが指摘された。また、女子児童生徒については性別役割分業意識と家事参加実態には関連が見られなかったが、男子児童生徒においては関連性が認められ、性別役割分業意識をもっている生徒ほど、家事参加が少ないという結果であった。

近年の子どもの家事参加実態について、総務省によって全国的に実施されている大規模調査である社会生活基本調査結果をみると、10 歳から 14 歳の子どもの家事労働時間は男女とも 2 分という結果である(総務省 2016)。今となつては、子どもたちの家事労働への参加はほとんどないに等しい。直井ら(2009)によると、小学生女子児童が比較的家事手伝いを行っており、小学生期から性別役割分業意識が助長される傾向を指摘した。

家庭科教科書においては、一貫して家庭の仕事としての家事労働を取り上げてきた。松田(2013)は、1967 年から 2011 年までに発行された小学校家庭科教科書を分析資料として、家事労働(家の仕事)に関してどのような記述で説明されているのかを考察している。また、教科書のイラストにも目を向け、社会の変化に伴ってどのような仕事を取り上げられているのか分析した。この研究では、労働概念としての家事労働が家庭科でどのように取り上げられてきたのかを明らかにすることを目的としており、本研究とは視点が異なっている。しかしながら、分析の結果から教科書の記述において、「自分でしなければならない仕事、家族で分担する仕事、家族と協力する仕事」「毎日する仕事や時々する仕事など」というような分類が見られたという指摘がある。「仕事の種類ややり方は、家族の年齢、人数は暮らし方などによって異なりますが、どの仕事も、必要で大切なもの」と記載され、生活を営む上で不可欠なものとして取り上げられていることが分かった。

以上のように、小学校家庭科において子どもたちが家庭の仕事に目を向け、自分事として取り組もうとする意欲と実践できるスキルを身に付ける学習は、家庭科教育の基盤として長く位置付けられてきた。そして、数少ないながらも性別役割分業の視点からの問題提起もなされてきた。

これまでも、小学校家庭科の授業で子どもたちが家庭の仕事に目を向けるためにどうしたら良いのか、検討が行われてきた。鳥羽と久保(2013)は、小学校家庭科で子どもたちの家事参加意欲を高める授業を考案するために、子どもたちの家事参加意欲に影響を及ぼす要因を分析し

た。そして、「家事をすることが自分の成長につながる」という認識が、家事参加に影響を及ぼしていると明らかにした。また、親の家事参加への働きかけが強い場合には、子どもの家事参加が促進されることも示された。これらの結果は、こんにちの小学校家庭科において、「家庭の仕事」の授業を行う上での示唆を与えるものである。

1-3. 家庭の仕事に映し出される性別役割分業意識

小笠原(2022)は、「家族のちからプロジェクト」(全10時間)の実践において、授業の冒頭で「家庭の仕事は、大人がやることか、子どももやることか」という問いを投げかけた。すると、多くの子どもが「家庭の仕事は親がやること」と考えていることがわかった。また、「家庭の仕事は母親(女性)がやるものだと思っている」「将来は、結婚して妻に家事をしてもらうから、自分はやらなくても(できなくても)いい」と考える子どもがいることも明らかになった。さらに、保護者に家庭の仕事に対する考え方を問うたところ、子どもに家庭の仕事ができるようになってほしいと考えてはいるものの、実際の生活では保護者自身、特に母親がその多くを担っている現状がうかがえた。つまり、家庭の仕事は、家族の一員として取り組むのではなく、子どもも保護者も「家庭の仕事は、大人や母親が担うもの」といった見方をもっているのではないかということが推察された。

この実践報告からも分かるように、子どもの実生活における家庭の仕事に対するジェンダー意識が、子どもが実生活において家庭の仕事を実践していく難しさの一つになっていると考えられる。

そこで、子どもの家事参加が進まない要因の一つとしてジェンダー意識の存在を位置付けるとともに、授業における児童の変容を意味づけ、保護者の思いを明らかにすることによって、「家庭の仕事」の授業を構想するうえで手がかりが得られると考えた。

2. 本研究の目的

本研究では、小学校家庭科題材である「家庭の仕事」の実践をジェンダー視点から分析することを通して、家庭科授業の成果と課題を提起したい。従来、「家庭の仕事」の授業では、学習指導要領を踏まえ家族の協力や生活時間の使い方の見直しが図られてきた。しかしその際、家族の協力の内実にある性別役割分業の実態や意識が付随的に浮かび上がってくるにもかかわらず、ジェンダー

平等の視点から見て、どのような授業を行っていくことが効果的なのかは、明らかにされていない。そこで本研究では、「家庭の仕事」の実践をジェンダー視点で捉え直し、授業を通して見られた児童や保護者の実態や変容を明らかにすることで、今後の家庭科授業のあり方を検討していく。

3. 研究の概要

3-1. 調査時期ならびに対象

2021年10月～2022年1月にかけて首都圏にある国立大学附属小学校第5学年37名を対象として実施された「家庭の仕事」に関する授業実践を取り上げ、家庭の仕事をはじめ家庭生活に対する子どもや保護者の価値観、ジェンダー観について分析・考察する。

研究的に取り組む一連の授業の実施にあたる倫理的配慮としては、以下の手続きを踏んでいる。まず、授業者は学校の管理職に授業の趣旨を説明し理解を得た。そのうえで、授業者は保護者に授業の意図を文書で説明すると共に授業への協力を依頼し、了解を得ている。

本研究で取り上げる一連の授業実践では、次の①から③の3つの場面において保護者との連携を図っている。

①子どもの学びの様子を伝える「家庭科だより」配信

②家庭での実践計画の練り直しへの保護者の参加

または家族ミーティングの開催要請

③家庭実践後のアンケート調査

①では、子どもが日々どのような姿でこの題材に向き合っているのかについて家庭科だよりを通じて伝えられた。②では子どもが立案した「家庭の仕事」の実践計画に対して、可能な範囲で家族ミーティングの時間を各家庭で設定し、子どもと共にプロジェクトの計画を練り直す活動への参加を要請した。③では、オンライン上でアンケート調査を実施した。本研究では①から③の分析資料を得て、授業によって子どもや保護者のジェンダーに関する意識の変容を考察した。論文執筆にあたり、個別事例が特定されないように配慮した。

本実践を行った授業者は、対象学級の担任でもある。そのため、日々の関わりから子どもとその家庭の状況について十分に理解し、上記のような倫理的配慮をとることで実践をすることが可能だと判断した。しかし、現代社会における子どもの実態、家庭の状況は様々であることもたしかであり、家族や家庭生活の内容を扱う際には、本実践以上の配慮を要する場合もある。対象とする子ど

ジェンダー視点による小学校家庭科「家庭の仕事」の授業分析

もや家庭の背景を十分に理解することや子どもの生育・生活環境等を総合的に捉えて、どの範囲まで実践が可能かを検討する必要がある。また、場合によっては、子どもの現実の家族や家庭生活を扱うのではなく、授業者側で仮想家族を見立て、それをもとに授業実践を行うことも考えられる。いずれも、対象にとってより最適な授業のあり方を考えていくことが重要である。

3-2. 方法

本研究では、小笠原(2022)の「家庭の仕事」に関する授業実践を取り上げ、子どもの発言や毎時間の振り返り、ワークシートへの取り組み内容をデータとして用いる。実践後、授業者と観察者と共に、収集したデータについて、ジェンダー意識の現れや、家庭の仕事に対する見方の変容について分析した。

授業後に保護者に対して実施したアンケート調査は、Microsoft Office の Forms を使用して作成し、各家庭の端末に配信し、回答を得た。期日までに回答があったのは、37 名中 31 名だった。本研究では、31 名の回答結果を分析の対象とし、家庭の仕事に対する本授業前後の保護者の意識の変容について考察した。

アンケート調査における文章による記述の回答については、ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析を行った³⁾。

4. 結果と考察

4-1. 「家庭の仕事」に対する家族の取組みの実態

本授業では、第1時において「家庭の仕事」が、日常場面でどのように行われているのか捉え直す活動が行われた。具体的には、①何を、②誰が、③どのくらい行っているのかを児童に可視化させる作業が行われた。作業では、図1(ワークシート一部抜粋)が用いられた。

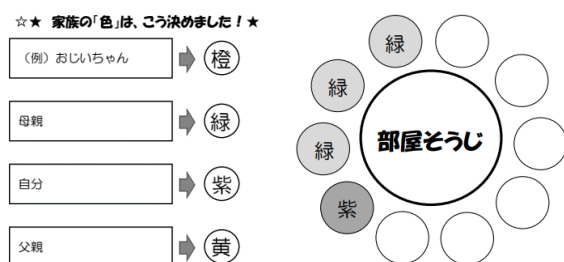


図1 家庭の仕事の取組み状況を示すワーク例

第1時で用いたワークシートの色分けは、各自がもつ色鉛筆を用いて行っていた。

①「何を」については、夏休みの家庭実践や日々の家庭の仕事を振り返り、各自四つ以上を取り上げた。どの四つを挙げるかは、任意である(図1は「部屋そうじ」の場合)。次に②「誰が」では、子どもに家族の色を決めてもらう活動から行った。同居している家族一人一人に対して、子どもが持参した色鉛筆の中から自身で自由に一色を割り当てる。図1の例でいうと、母親→緑、自分→紫である。誰に対してどの色を割り当てるかは、子どもの任意とした。最後に③「どのくらい」については、割合で示せるようにした。図1「部屋そうじ」の周りにある小さな円に、②「誰が」で割り当てた家族の色を塗っていく。図1を例に挙げると、全体のうち母親(緑)が3割程度、自分(紫)が1割程度、日々部屋そうじに取り組んでいることを示している(残りの6割は、その他の同居する家族の色が塗られる)。もし、子どもが日常を振り返り、部屋そうじは、母親しか取り組んでいないと捉えたならば、10個の円すべてが緑で塗られている状態になる。家庭の仕事の量を明確に数値化することは難しい。そこで「10のうちどのくらい」という、あくまでも子ども自身がどう捉えているかを大切にし、ある程度ふり幅のあるものさしを用いたことで、子どもが取り組みやすいワークになるような工夫がされていた。

本ワーク後の振り返りの記述内容を分析したところ、時間内に記述が見られた33名のうち21名の内容から「ほとんど母親がやっている」「母が一番多く仕事をしていて大変」等、家庭の仕事の多くは母親(女性)に偏っていることがわかった。「母親がいなくなったら料理や洗濯、掃除に困ると思った」「お母さんがいなくなったら家が成り立たなくなりそう」といった記述も見られる等、家庭生活を営む上で、母親の存在の重要さも伺えることから、家庭の仕事と母親(女性)の関連性の強さが分かる。

子ども自身はというと、「自分はほぼ何もやっていない」「家庭の仕事における自分が占める割合が少ない」「楽しいことはやっているが、面倒なことはやらない」等、家庭の仕事は大人に頼っている現状を自覚しており、日々の生活において家庭の仕事を担っている様子はうかがえなかった。「自分もやっている」と明確に記述した子どもは33名中4名であり、多くは「自分でできることはもっとやったほうがいい」といった今後の家庭生活における自分のあり方、関わり方を見据えた記述をしていることから、現状での取り組みが少ない事実が明ら

ジェンダー視点による小学校家庭科「家庭の仕事」の授業分析

かとなった。

父親に関する記述では「父が意外と家事をしている」「お父さんも少しある(やっている)」といった言葉が見られ、父親が家庭の仕事に取り組むことに意外性を感じている子どもがいることが分かった。これに加え、「私も父も、もっとお手伝いをしたいと思った」といった記述が目立ち、日常生活において母親(女性)に比べると、父親の家庭の仕事への関わりの少なさがうかがえた。父親の取組みの様子について振り返りで特記した子どもは33名中15名であり、その記述内容も母親に比べると「やっていない」ことを示す内容が多い。これらのことから、家庭の仕事と父親との関わりの薄さが明確であった。

以上の結果から、本研究の調査対象である子どもの家庭では、家庭の仕事の多くを母親(女性)が担っており、父親(男性)の参画が少ないこと、子ども自身が日常的に家庭の仕事を担当していない背景が明らかになった。

4-2. 家庭の仕事に取り組むのは、大人か、子どもかの話し合いを通してみる潜在的ジェンダー意識

実践の中で、授業者は「家庭の仕事は、大人がやることか、子どももやることか」という問いを子どもたちに投げかけ、話し合いが行われている。この話し合いの意図は、子どもが抱えている家庭の仕事に対する価値観や、取り組むまたは取り組まない理由とその背景を明らかにしていくことであった。この話し合いは、テーマを提示した後、各自が「大人がやる」「子どももやる」の二つの立場を決めて、各々の考えを伝え合う形式で行われた。当日、授業に参加した児童36名(男子19名、女子17名)中、「大人(親)がやること」の立場を取った子どもは12名(男子9名、女子3名)、「子ども(自分)もやること」の立場を取った子どもは24名(男子10名、女子14名)だった。話し合いの前後では、テーマに対する子どもの考えを知るため、ワークシートへの記述を行った。ワークシートにかかれた子どもの記述内容を細分化し、文章の中に頻繁に表れるキーワードを抽出し、子どもがそれぞれの立場をとった理由の決め手となっている考え方をカテゴリとしてまとめ分析した(表1、表2)。

表1、表2に基づき、記述例を分類すると以下のような傾向があることが分かった(図2、図3)。家庭の仕事を「子どももやる」と回答した子どもの記述(図2)のうち、最も多かったのが「将来・自立のため」に関わる記述である。

表1 家庭の仕事を「子どももやる」理由と言葉のカテゴリ分類

	カテゴリ	記述例
1	義務感から	両親が忙しいから自分がやらないといけない／大人に申し訳ない
2	将来・自立のため	大人になったら役立つ／困らない
3	生活を快適にするため	すべて大人にやってもらったら予定の時間どおりに終わらない／心地よく暮らすため
4	家族の一員として	やってもらえばかりでは無責任／家族の一人として住んでいるから
5	楽しいから	やっていて楽しい
6	家族の仲が深まるから	一緒にやると仲がよくなる
7	達成感や喜び、嬉しさを 感じるから	やり切ったあとの達成感が味わる／喜ばれると嬉しい

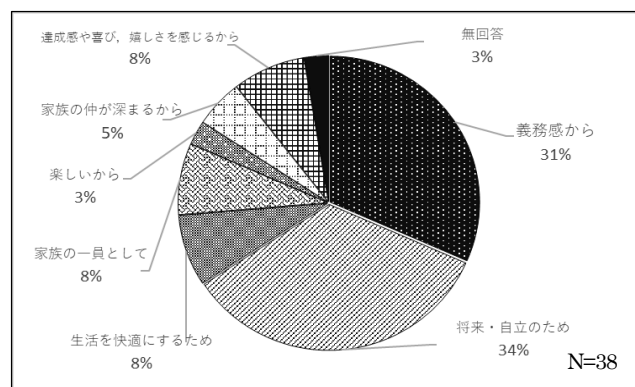


図2 家庭の仕事を「子どももやる」と回答した理由

次いで多かったのが「義務感から」に関わる記述であることが分かった。

「義務感から」に関わる記述として、「母親が疲れるから」「両親が忙しく自分がやるしかない」等、家庭の仕事に取り組む理由に、家庭環境の課題を背景とした理由が目立っていた。「将来・自立」については、「できるようになりたい」といった前向きな記述はなかった。

「いつかやらなければいけないからやる」「一人暮らしをした時にできないと困るからやる」という義務感に近い記述が多かった。

一方、大人がやる立場をとった子どもの記述は、以下のような結果となった(図3)。「子どももやる」立場の理由では、大人や親等の状態や気持ちを優先する傾向が高かったが、「大人がやる」立場の理由では、自らの技能の低さ故の取組みにくさ、自分自身の気持ちを優先した理由を述べる子どもが多い傾向にあった。その他の理由として挙げられた「親の家だから」「子どもの仕事は勉強」といった記述は、家庭内での立場や年齢を意識した内容が見られた。また、進学を見据えた学習塾通い、日々の習い事等により家庭の仕事に取り組んだり、子ども自身がじっくりと家庭に向き合ったりする時間を確保することができないといった高学年故の課題を感じている様

ジェンダー視点による小学校家庭科「家庭の仕事」の授業分析

子が反映されていると考えられる。

表2 家庭の仕事を「大人がやる」理由と言葉のカテゴリー分類

	カテゴリー	記述例
1	技能について	大人がやったほうがきれいにできる／子どもができないこともある
2	効率・スピードを考えている	自分がやっても遅い
3	面倒くさいから	やりたくない／面倒
4	安全を考えている	大人じゃないと危ないことがある
5	疲れがあり時間もないから	塾で疲れている／時間がない
6	必要感から	いずれやるから、今はやらない
7	その他	親の家だから親の好きなようにしたほうがいい／勉強することが仕事

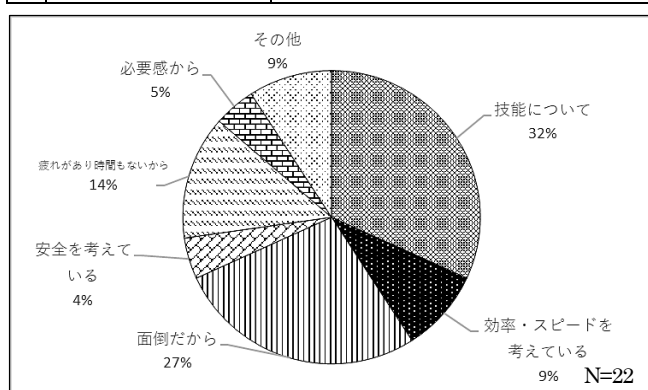


図3 家庭の仕事を「大人がやる」と回答した理由

子どももやる理由のうち、「母親が大変」といった記述はあったが、母親だから、女性だからといった性別を意識した具体的な記述はなかった。

ただ、男子においては、大人がやる・子どももやる、それぞれの立場にほぼ同数の児童が属している一方で、女子児童では17名中、14名が「子どももやる」という立場をとっていた。この回答状況について、男女間の有意差検定の結果は有意確率0.061となり、男女間に有意差があるとは言えない結果であった。しかしながら、実際の話し合い場面では「子どもがやる」と回答した女子児童が「女だから家庭の仕事はいつか自分もやること」

「お父さんよりお母さんのほうがやっているから」、「将来自分でもやるから」、父親がいる家庭であっても「お母さんに何かあったら自分(女)しかいない」といった発言をしている。これらの発言から、女子児童自身が家庭内における女性としての役割、立場を強く意識している様子が伺える。それに引き換え「大人がやる」と回答した男子児童は、「家庭の仕事は妻にやってもらう、男は外で働いてくる」、「お父さんはやっていない」、「お

小遣いをくれるならやる」という発言をしている。これらの発言からも、男子(男性)が家事を担うことに対して消極的な姿が垣間見える。統計的な有意差は見られないが、授業内での児童の発言から男女による家庭の仕事と性別役割の認識のずれに気づくことができた。

以上のような児童の実態があったものの、子ども同士がそれぞれの立場で家庭の仕事に対する考えを述べ合う中で、考えが揺さぶられ、変容していく様子も見られた。例えば、「家庭の仕事は妻がやる」という考えに対して、女子児童から「家庭のことは、二人(夫婦)で協力することだと思う。自分が家族をつくった時にはそうでありたい。」と意見が挙がった。この児童の家庭では、主に家庭の仕事に取り組んでいるのは母親だが、この児童は父親が協力する姿を頻繁に見ている。両親が支え合いながら家庭生活を築いている様子を間近で見ることにより、自分の将来の家庭生活の姿を思い浮かべたようだった。

また、ある男子児童が「自分がやっても、注意されたり、結局、親に直されたりして気分が悪いから、家庭の仕事はやりたくない。」と話す、それに対して他の児童から「どうやったら相手が(家族が)喜ぶか考えてやってみたらどうか。1度で諦めずに練習を積み重ねたらどうだろうか。」という提案がされるなど、各々が真剣に家庭の仕事との向き合い方について考えている様子が伺えた。さらに、話し合いを重ねていくと「心地よいくらしをするために、みんなで家庭の仕事を分担するという意見があるが、心地よいくらしって、どんなくらし方だと思っているか?」といった、家庭生活の本質に迫る問いが児童から出される場面もあった。

「家庭の仕事は、大人がやるものか、子どももやるものか」というテーマで話し合いを重ねる中で、心地よいくらしとは何か考えたり、将来、夫婦、性別、年齢、親、子どもといった様々な視点から家庭の仕事を見つめ直したりすることで、一人一人が生活者として家庭生活について主体的に考え始める姿が現れていた。

4-3. 「家庭の仕事」に対する保護者の思い

保護者から見た家庭生活の様子を把握するため、子どもが第1時で行ったワークと同様の内容に取り組んでもらった。第1時において、子どもが記入した家庭の仕事(円の中心部分)はそのままに、周りの小さい円を白紙にしたワークシートを配付した。子どもと同様、保護者にも誰がどのくらい家庭の仕事に取り組んでいるか色塗り

ジェンダー視点による小学校家庭科「家庭の仕事」の授業分析

をしてもらうことで、保護者自身の家庭生活の捉えを明らかにすることができる。色塗りワークに加え、子どもの家庭の仕事への取り組みの様子や子どもに期待することについて、保護者がどのように捉えているのか表出できるよう記述欄も設けた。この記述に頻繁に見られたキーワードを抽出し、抽出したキーワードをカテゴリーに分類した。これをもとに、保護者が家庭の仕事と子どもの関わり方についてどのような思いをもっているのか以下の表3に整理した。

保護者の記述は、5つのカテゴリーに分類することができ、それぞれのカテゴリーに関わった記述は図4のような結果となった。

表3 保護者の思い記述例と言葉のカテゴリー分類

	カテゴリー	記述例
1	きょうだいの手本のため	お姉ちゃんみたいになるぞと真似してやってくれる
2	家族の一員として協力してほしい	他の家族のために／みんなのことを考えて／一人に頼らず全員で
3	自主性を育てたい	自主的にお手伝いをする／やってみようと思ったらやる／視野を広げて気付いてやる
4	将来・自立のため	自分のことをしっかりやる／将来できないと困る／自分で整える
5	性別・役割を考えている	忙しい父親をサポートする／父は仕事、母は家事、子どもは塾・習い事

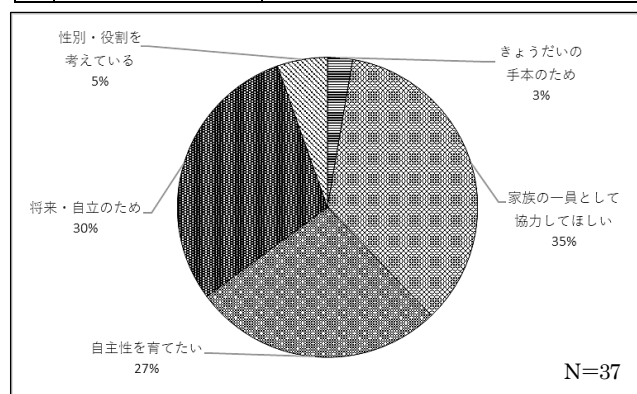


図4 家庭の仕事と子どもの関わり方についての保護者の思い

図4にあるように、家庭の仕事は、家族の一員として協力することについて述べている保護者が多かった。この記述は、1家庭を除き母親が回答しているということもあり、一番家庭の仕事を担っている母親が子どもの参画を求めている様子が分かる。次いで多かった自主性に関わる記述は、家庭の仕事への取り組み方に関する内容だった。保護者は、自ら進んで家庭の仕事に取り組む子どもの姿を期待していることが分かる。

また、2例ではあったが、性別による役割分業に関す

る記述が見られた。母親自身が家庭の仕事の多くを担っている現状をはじめ、子どもへの協力を期待している様子や性別役割分業に関する記述を鑑みると、家庭の仕事に対する保護者のジェンダー意識が現れた結果となった。

4-4. 児童Aに見られる家庭の仕事と性別役割意識

本実践の中でも家庭の仕事に対する性別役割分業意識が顕著に表れた事例として、男子児童Aとその保護者を取り上げる。本実践の冒頭で、家族と家庭の仕事のあり方について、児童Aは次のように捉えていた。

【児童A】家庭の仕事は大人がやる。なぜなら、将来、妻にやってもらい、今は時間がない。やっても怒られるし、自分(親)がやった方が、手間が省ける。子どもの仕事は勉強をすることと、学校に行くこと。よく寝て遊ぶこと(注：下線は筆者による)。

児童Aの記述には、①性別(将来、妻にやってもらい)、②時間(今は時間がない)、③技能(親がやったほうが手間が省ける)、④立場(子どもの仕事は)という四つの考え方が現れていることが分かる。児童Aは、授業内でも「家事は妻にやってもらいから、できなくてもいい」といった発言を繰り返していた。また、自分は「外へ出て家族のために仕事に専念する」と述べていた。ワークシートへの記述やその後の授業内に表れる発言、姿から、児童Aは「男性は家庭外での仕事、女性が家庭の仕事」といった家庭生活における性別役割分業意識が顕著であったと言える。児童Aの保護者(母親)によって書かれた家庭の仕事についての記述は以下の通りである。

【児童Aの母親】わが家では、「父が仕事、母が家事」と役割分担をしているため、家事のほとんどを母が行っている。子どもは学校、習い事、勉強で忙しく時間がないため家事をする機会が少ないのは当然だと思う。しかし、将来一人暮らしや共働きになった時、何もできないのは困るので、少しずつ家事スキルを身に付けてほしいです。まずは、お手伝いから(注：下線は筆者による)。

母親の記述からも、①性別役割(父が仕事、母が家事)、②時間(子どもは忙しい)といった、児童Aの捉えと類似する記述があることが分かる。後段においては、③将来(一人暮らしや共働き)のことを願い、お手伝いから始められるとよいということが記述されているものの、児童Aの現状の家庭環境では、父親が仕事、母親が家事といった性別役割分業意識の上に家庭生活が営まれていることが分かる。

今回の実践において、子どもと保護者の考え方が明確

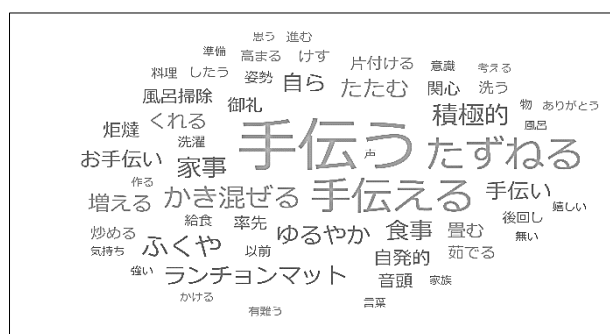
に一致した典型的な事例として児童 A に着目したが、保護者の家庭生活に対する姿や考え方が子どもの家庭生活に対する考えをつくる上で影響を与えていることが示唆された。

本実践の特色の一つに、「家庭の仕事」への子どもの取り組みに際し、何にどのように取り組むのかを家族とともに練り直す時間を設けている点が挙げられる。これは、学校で、子どもが立案した実践計画を家庭に持ち帰り、家族ミーティングという形をとって家族と共に計画を練り直すという活動である。この活動は、子どもが一時的な「お手伝い」として家庭科で学習したことを家庭でやってみるという課題で終わらないように、子ども・母親・父親・きょうだい、家庭生活を構成する一人一人が主体的に家庭の仕事に参画していくことが、「よりよい生活」をつくるという家庭科教育の本質に迫る試みであった。

Response	Percentage
はい (Yes)	74%
いいえ (No)	26%

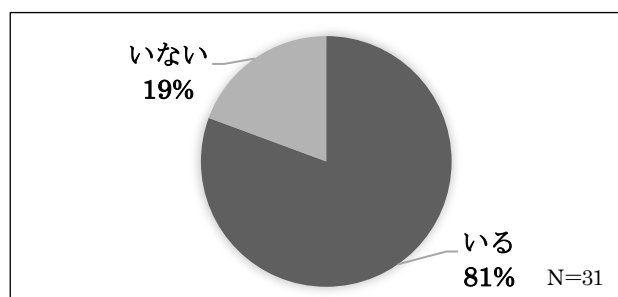
N=31

授業の前後で、子どもの家事参加や家族との関わりに変化が見られたと回答した保護者は、全体の74%に及んだ。変化が見られた理由を示す記述内容をテキストマイニング分析したところ、図6のような結果となった。



文字が大きいほど、頻出した語であることを表している。分析結果から、図6に示すように記述内で頻出していたのは「手伝う」、「手伝える」という言葉だった。「自発的に手伝おうとする姿勢が見られるようになった」「手伝うことはある？と声をかけてくれるようになった」という子どもの家庭の仕事に対する取り組み方の変容を示す記述が目立った。これらの結果から、課題に取り組んだ後も子どもが自ら進んで家庭の仕事に取り組んだり、家庭の仕事に対する関心が高まったりしたことが分かる。「いいえ」と回答したうちの2家庭の子どもは、本授業が行われる以前から、自分の役割として家庭の仕事を担っていたため、「変容がない」と回答したと推察される。

次に、授業前後で、子ども以外に、家事参加や家族との関わりに変化が見られた家族がいるかという設問に対しては以下のような結果となった(図7)。



家族の中に変化があったと回答したのは全体の 81%であった。多くの家庭でこの一連の授業による影響が見られたことが分かる。アンケートの記述内容のテキストマイニングを行い分析した結果が以下の図8である。「簡単な家庭の仕事は任せたいと思えるようになった」という旨の記述が多く表れていた。また、「手伝いを任せられる」「頼もうと思える」といった記述が見られた。

記述内容を分析していくと、主語はアンケートの回答をした記述者本人であることが分かる。

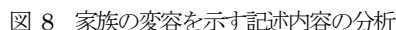


表4 保護者自身の変容を表す記述(下線部は筆者)

4-4で取り上げた児童Aについては、プロジェクト前後において目立った変化はなかったという回答結果だった。しかし、アンケートで別途設けていた設問3「これからのわが家に必要なちからとは？」において、母親は以下のような記述を残している(下線は筆者)。

が伺える。本授業以前に比べると、性別や親と子という立場で役割を分けるのではなく、お互いを家族の一員として認め、共に協力しあうこれからの家庭生活の姿を展望する様子が表れた結果となった。

「家庭の仕事」をテーマとした授業実践をもとに、ジェンダーの視点で児童の学びと保護者の意識変容について考察してきた。授業を分析した結果、明らかになったのは次の4点である。

第1に、家庭生活の実態が、家庭の仕事に対する子どもたちのジェンダー意識とつながっていることである。授業開始当初は、家庭の仕事を誰が行っており、誰がすべきなのかという話し合いにおいて、大人がするもの、母親(女性)がすることという現状を違和感なく受け止めている児童の実態があった。

第2に、「家庭の仕事」を誰がするべきなのか、という話し合いを重ねる中で、個々の児童の考えが揺さぶられ、それぞれが自分の考えを省察する機会を得ていたことである。日常的に父親も母親とともに協力して家事に取り組む姿を目の当たりにしている児童の意見は、家庭の仕事は主に母親がやるものだと考える児童たちに一石を投じるようになった。家族全員にとってよりよい家庭生活とはどういうものなのか、どんな生活をめざしていきたいのか、自分の家庭生活にひきつけて考え始める様子が見られたことは、それまでの「自分にとってのあたりまえ」だった家庭生活が絶対的なものではないという気づきにつながったと考えられる。

教育デザイン研究第14巻（2023年1月） 147

につながるという保護者自身の気づきを促し、児童のみならず、保護者の意識変容が見られた。

第4に、「家庭の仕事」の実践は、子どもたちが現在の家庭生活の営みを見直すことによって、家族の一員としての自分の役割について考えるとともに、家族がどのように家庭生活を営んでいるのかを自分の目で確かめ、家族との対話を重ねるきっかけとなったということである。子どもたちは、家庭生活がいつも通りに営まれているのは、家族の支えがあって成り立っているということに気づき、家族との関係を改めて見直すことになった。保護者との連携を得て、「家庭の仕事」というテーマが家庭科の授業内で完結するのではなく、各家庭のそれぞれの実態の中で、子どもたちも家庭生活をつくる大切な一員であるという共通認識を喚起したと言える。

本実践において、課題として残されていることとして、実践の中で子どもたちの家事参加が「お手伝い」という捉えを必ずしも超えられなかったことが挙げられる。小学校家庭科の学習指導要領及び教科書の中で、家庭の仕事は「お手伝い」という言葉で表現されていない。子どもたちが取り組むのは、あくまでも「仕事の分担」であり、子どもなりの役割として家庭で行われている様々な仕事の一部を担うことを目指している。しかし、保護者に「お手伝いをしてもらおう」という捉えが日常的な感覚として存在していたことは否めない。児童にとっても、「お手伝い」という言葉と実践が結びついたこともあるだろう。生活を営む上で必要な「仕事」が家庭の中にあり、それを行えるようになることが子どもたちにとっての自立につながるということを意識化させる手立てが必要だったのではないだろうか。

ジェンダーの視点と重ねるならば、自立した生活者であるということは、ジェンダーに関わらず自分の生活を自分で管理する知識とスキルを身につけている状態であることを言う。今後の家庭科教育実践の中で、子どもたちが家庭の仕事を「自分事」として捉え、自分なりの生活をつくっていく素地となる力をつけていくような実践を重ねていくことが必要である。家庭科の授業開発の視点として以上の課題を受け止め、今後の研究につなげていきたい。

注) ユーザーローカル AI テキストマイニング

<http://textmining.userlocal.jp>

引用文献

- 直井道子・村松泰子編(2009)『学校教育の中のジェンダー 子どもと教師の調査から』日本評論社
- 藤原康晴・宮本寿江・岡部禎子・所康子(1989)「児童・生徒の家事に対する性別役割分業意識と家事手伝いとの関連性」『日本家庭科教育学会誌』32(2)pp.1-5
- Houston, Barbara (1985) Should public education be gender free? in Stone, Lynda ed. (1994) *The Education Feminism Reader*, New York: Routledge, pp.122-134
- 堀内かおる・村上飛鳥・大田桃可(2021)「小・中学生のジェンダーに関する実態と意識—家庭科教育の視点から」『横浜国立大学教育学部紀要 I (教育科学)』5, pp.249-264
- 松田典子(2013)「子どもの家事労働についての考察—小学校家庭科の教科書の記述から—」『文教大学教育学部紀要』47, pp.129-138
- 内閣府(2019)「男女共同参画に関する世論調査」
<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/index.html> 2022年8月20日アクセス
- 小笠原由紀(2022)「私にくらしの主人公〜今と未来を変える家族のちから〜」『令和3年度横浜国立大学教育学部附属横浜小学校研究紀要』pp.139-144
- 総務省(2016)「平成28年社会生活基本調査 / 調査票 A に基づく結果 生活時間に関する結果 主要統計表」
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200533&tstat=000001095335&cycle=0&tclass1=000001095377&tclass2=000001095393&tclass3=000001095394&stat_infid=000031617831&tclass4val=0
2022年8月20日アクセス
- 鳥羽波峰・久保桂子(2013)「小学生の家事参加に影響する要因と家事参加を促進する家庭科の授業」『日本家庭科教育学会誌』55(4)pp.227-236
- World Economic Forum(2022)*Global Gender Gap Report 2022*
<https://www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2022> 2022年8月20日アクセス